

日向林B遺跡の石器組成

—台形様石器の検討—

谷 和隆

I はじめに	V 台形様石器の分類
II 日向林B遺跡の概要	VI 台形様石器の機能・用途
III 台形様石器の認識	VII まとめ
IV 台形様石器の認定	

I はじめに

1993年～1995年に調査された長野県上水内郡信濃町の日向林B遺跡は54点の石斧が出土し話題となったが、大規模な緊急発掘であったことから調査時点では十分な石器の観察ができていなかった。

今年度より報告書作成にむけての整理作業が始まった。現在は器種判別が終わった段階で、

器種	数量	数量比	平均重量 g	重量 g の合計	備考
砕片・細片	3010	33.6%	0.2	585.6	
剥片	2802	31.2%	3.0	8464.2	
台形様石器	1345	15.0%	4.1	5564.5	
微細剥離のある剥片	714	8.0%	5.9	4214.8	
切断剥片	512	5.7%	3.9	2007.8	
石核	312	3.5%	18.0	5603.3	
2次加工のある剥片	170	1.9%	4.9	824.8	
石斧	79	0.9%	81.4	6429.2	認定数54点
敲石	14	0.2%	368.1	5153.0	
砥石	5	0.1%	1047.0	5235.0	認定数2点
原石	3	0.0%	357.7	1073.0	
有孔石製品	1	0.0%	53.1	53.1	
磨石	1	0.0%	98.8	98.8	
合計	8968			45307.1	

第I表 日向林B遺跡の石器組成

細かい属性分析や接合作業はまだ行われていないが、石器全点に目を通すことができた。この作業の中から、いままで認識できなかった台形様石器に類する石器が大量に発見された。本稿は日向林B遺跡出土の台形様石器をどのように整理していくかを検討するものである。

II 日向林B遺跡の概要

先土器時代AT降灰以前の石器群は約1,000㎡の範囲から出土している。

約30m×25mの環状ブツ群が存在し、環の中央には直径約10mの遺跡密度の高いブロックが存在する。また、環の外側にもブロックが数ヶ所ある。出土層位が同じであること、平面的に他の時期の遺物の分布域と重ならないこと、石器形態や石材の共通性が強いことから遺物の同時性は高いと思われる。

石器総数は約9,000点であり、石器組成を第1表に示した。剥片石器のほとんどが台形様石器に類するものであり、ナイフ形石器や石刃は存在しない。

石材組成を第2表に示した。このうち台形様石器の素材となる石材は黒耀石が圧倒的に多く、玉髄も多用されている。

III 台形様石器の認識

台形様石器は形態の斉一性が低く、加工の頻度が低いことからか、「2次加工のある剥片」

材質	数量	数量比	総重量g	重量比	平均重量g	備考
黒耀石	6479	72.2%	15384.3	34.0%	2.4	
玉髄	1901	21.2%	8444.0	18.6%	4.4	
無斑晶質安山岩	341	3.8%	3772.1	8.3%	11.1	
蛇紋岩	152	1.7%	7201.8	15.9%	47.4	岩石学的には蛇紋岩に含まれないものもある
硬質頁岩	43	0.5%	334.1	0.7%	7.8	
珪質凝灰岩	14	0.2%	164.5	0.4%	11.7	
凝灰岩	12	0.1%	111.7	0.2%	9.3	
砂岩	10	0.1%	6120.9	13.5%	612.1	
安山岩	5	0.1%	3356.0	7.4%	671.2	礫石器によく使われる安山岩
チャート	4	0.0%	268.1	0.6%	67.0	
頁岩	3	0.0%	2.6	0.0%	0.9	
珪質頁岩	2	0.0%	1.2	0.0%	0.6	
粘版岩	2	0.0%	145.7	0.3%	72.9	
合計	8968		45307.1			

第2表 日向林B遺跡の石材組成

もしくは「微細剥離を有する剥片」と分類されることが多く、器種レベルの判別が難しい石器と思われる。現実問題として、2次加工のある剥片等と台形様石器との中間的な要素をもつ石器が多く存在し、明確に区別するのは難しい。したがって、1980年代以前は器種として認識されることが少なかった。1980年代以降の、麻柄一志、須藤隆司、佐藤宏之らの研究により（麻柄1982）（佐藤1988）（須藤1986）、ようやく器種として注目されるようになった。台形様石器に対して「立野ヶ原型ナイフ形石器」（麻柄1982）、「台形様石器」（佐藤1988）、「藪塚系ナイフ形石器」（須藤1991a・1991b）という呼称が提起されたが現在では「台形様石器」という呼称がもっとも普及しているようである。そのため、筆者も便宜的に台形様石器と呼称することになっている。

IV 台形様石器の認定

日向林B遺跡で台形様石器とした石器は、「主として貝殻状の剥片を素材とし、2次加工の施された部位と鋭い縁辺を持つ石器」である。この石器には鋭い縁辺を刃として使用する石器と、加工部位を刃として使うスクレイパー的な石器とがあるようだ。本来この両者は別の器種名をつけるべき石器であるが、両方にとれるものや中間的なものが多いため明確に区別することができない石器である。そのため、ここでは仮に両者を含めて台形様石器として、分析をすすめるなかで両者を分離していくこととした。また、台形様石器の加工の1つに切断が存在するが、加工が切断のみであるものは台形様石器ではなく切断剥片として判別をした。その他に微細剥離を有する剥片のなかには、打面や切り立った端部を切断や2次加工と同様の役割を持つと考えた場合に、台形様石器と同様の機能が想定されるものが含まれている。

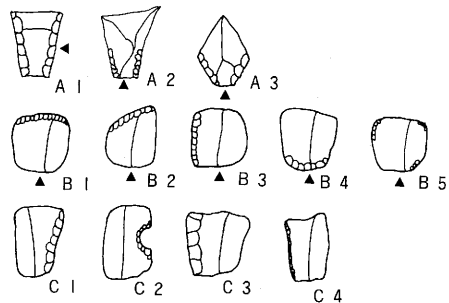
V 台形様石器の分類（第1図参照）

台形様石器は形態の斉一性が低く分類するのも難しい。分類したとしても中間的な形態のものが多く存在し、明確な区別ができないのが現状である。しかし、典型的なものをどうしを比べると異なる要素が認められるため、分類は行うべきであろう。本稿は明瞭な部分とそうでない部分とを認識していくために、仮ではあるが典型的なものから分類を試みるものである。

A類：両側縁に加工が施され基部が作り出されているものをA類とする。次の3種に細分される。

A1類（第2図1～5）：素材を横に用いて両側縁に加工を施すもの。

50点以上存在し量的に安定している。打瘤が厚く裏面が凸状になっているものが目立つ。加工には器面を覆うような平坦なものと、急角度の刃潰し状のものがある。平坦な加工は裏面からのみではなく表面からも施されるため、横断面形が凸レンズ状もしくは菱形になるものが多



第1図 台形様石器の分類模式図

い。器面全体が平坦な剝離によって覆われて、両面調整の槍先形尖頭器のような基部が作り出されているものも存在する。刃潰し状の加工も表裏両方向から施される場合があるが、1つの側縁が表裏方向から加工されるものは認められない。横断面形は偏平な台形もしくは平行四辺形になるものが多い。

A2類：素材を縦に用いて基部を中心に加工が施され先端が尖らないもの。数点存在するのみであり量的には少ない。

A3類：素材を縦に用いて基部を中心に加工が施され先端が尖るもの。現時点で日向林B遺跡にこの形態のものは認められないが、同じ野尻湖遺跡群内の貫ノ木遺跡等に特徴的に存在する。

B類：貝殻状の剝片の一部に急斜度の加工が施されるもの。素材には長幅比が1：1に近い剝片が用いられることが多い。加工部位、加工頻度はさまざまで分類しがたい部分もあるが、加工部位によって次の5種に分類することとする。それぞれの加工部位は打点を下においてみることとする。

B1類（第2図6～11）：上辺に加工が施されるもの

B2類（第2図12・13第3図14）：上部から横部にかけて斜めに加工が施されるもの

B3類（第3図15・17）：横辺に加工が施されるもの

B1～B3類は加工頻度が高く明確に製品として認定できる石器である。急角度の加工が連続して施され貝殻状の剝片の1辺を形成している。

B4類（第3図16・19）：下辺に加工が施されるもの

B4類は石器の背面に打面から加工が施されるものと、打面に石器の背面もしくは腹面から加工が施されるものが存在する。そのため、主要剝離面との切り合いがつかめないものが多い。しかし、遺跡内から出土する石核に打面調整や、頭部調整のようなものが認められないことから、2次加工である可能性が高いと考えられる。

B5類（第3図18・20～23）：端部に加工が施されるもの

B5類は最も数が多い。加工頻度が低いことから製品か否かの判断が難しい。また、加工も明確な刃潰し状のものから、使用による刃こぼれとの判断がつけがたいものまである。加工部位は刃部と思われる縁辺の隅もしくは、刃部反対側の側縁の隅に施されるものが多く、ある程度の規則性がある。

C類：スクレイパー的な加工部位を持つもの

本来はスクレイパーとして判別すべきものと思われるが、B類との中間的なものが多く存在することから、仮に台形様石器に分類してある。B類と比べると縦長の剝片あるいは横長の剝片を素材とする傾向があり、形態的にも不安定である。

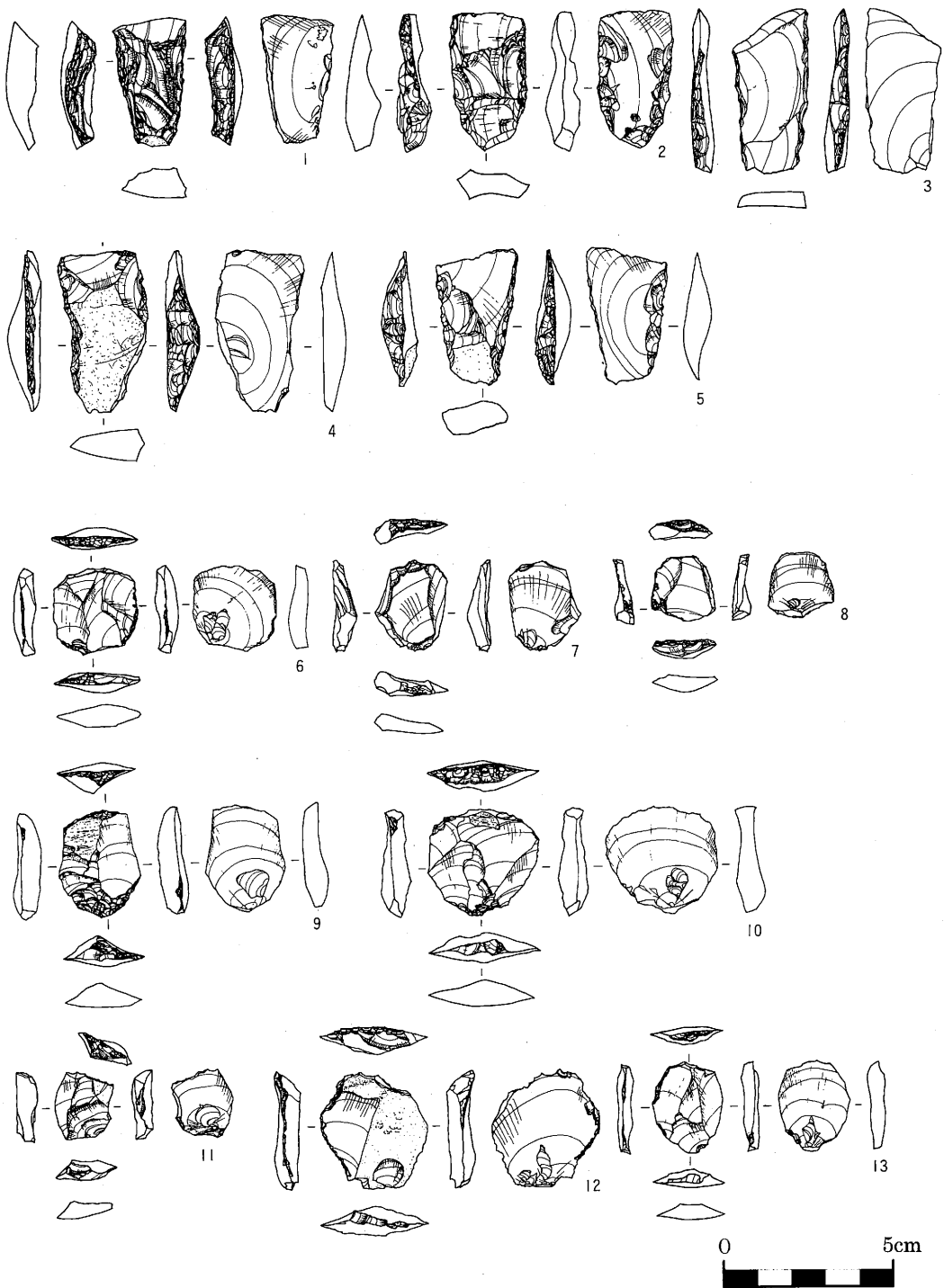
C1類（第3図24）：削器状の刃を持つもの

剝片の一部に削器状の緩斜度の加工が施されているもの。

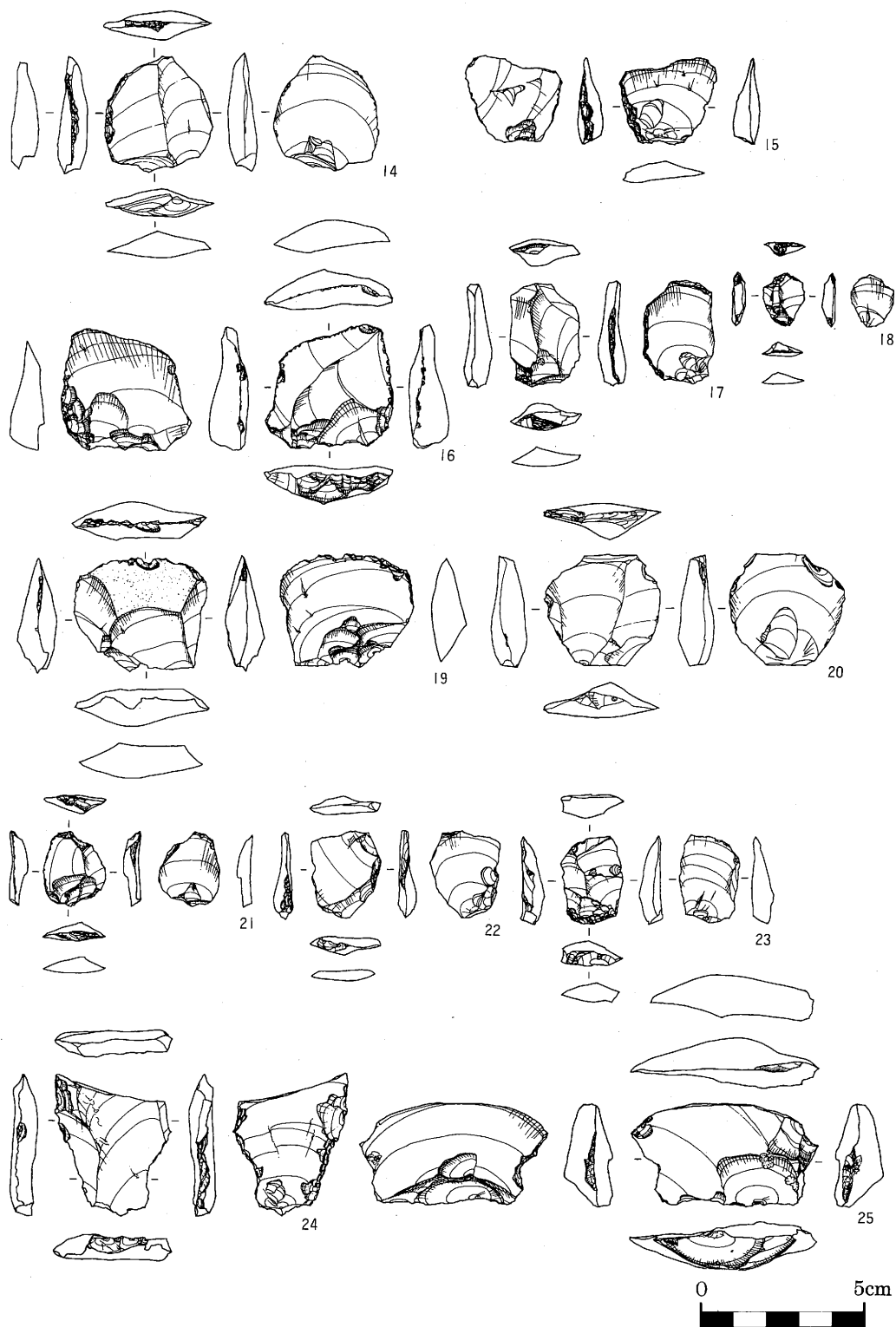
C2類（第3図25第4図26・27）：ノッチ状の刃を持つもの

剝片の一部にノッチ状の加工が施されているもの。

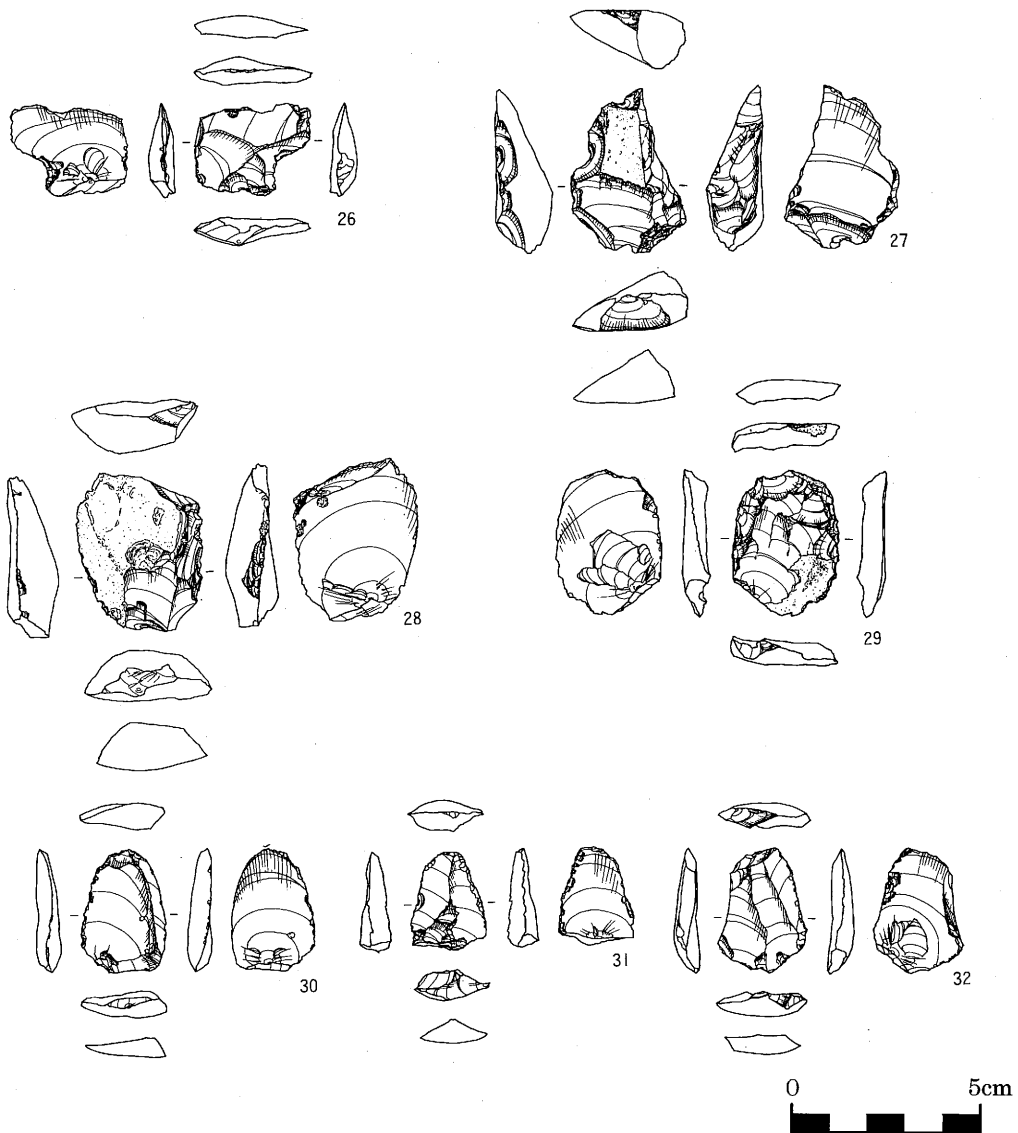
C3類（第4図28・29）：搔器状の刃を持つもの



第2図 1～5：A1類 6～11：B1類 12・13：B2類 5のみ玉髄製、その他は黒曜石製



第3図 14：B 2類 15・17：B 3類 16・19：B 4類 18・20～23：B 5類 24：C 1類 25：C 2類 24のみ玉髄製、その他は黒曜石製



第4図 26・27：C 2類 28・29：C 3類 30～32：C 4類 すべて黒耀石製

剥片の一部に搔器状の急斜度の調整が施されたもの。B類の一部との区別が難しいが、素材がB類のものより厚手であり、その分加工部位も甲高になる点で区別している。

C 4類（第4図30・32）：微細剥離によって刃がつけられているもの

C 1類と類似性が強いが、加工が微細で2次加工によるものか使用によるものか判断がつけがたいものである。B類の縁辺に見られるような微細剥離と比較すると、数が非常に多く剥片の1辺にびっしりと並ぶ。

以上のように仮分類してあるが、前記したように中間的な形態が多く存在することから分類

が難しく流動的である。しかし、A類とB類は明らかに異なる道具であると思われる、両者を台形様石器として分類するだけでは不十分と思われる。また、切断による加工についても今後は検討していかなければならない。

VI 台形様石器の機能・用途

以上のように台形様石器を分類してみたが、それぞれどのような機能・用途を持つのであろうか。

A類とした台形様石器はいずれも基部が作り出され、基部に斉一性が認められることから、柄をつけて使用する石器であることが想像される。残された鋭い縁辺を刃として使用したと考えられるため、何かを切るための道具であったと思われる。

B類は形の斉一性が低いため柄はつけられなかったと思われる。残された縁辺を刃として使用する場合と、加工が施された部位を刃として使用する場合とが考えられる。

B1～B3類の側縁に施される加工は刃潰しと捉えることもできるが、刃潰しとして捉えるにはB5類と比較すると必要以上の加工が施されているように思われる。したがって、加工された部位が搔器の刃部のような機能を持っていたことが考えられる。しかし、B1～B3類に残された鋭い縁辺には使用痕と思われる微細な剝離が認められる場合が多いため、鋭い縁辺を刃として使用したことも考えられる。両方の機能を持った石器であったのだろうか。

B4・B5類の加工部位は刃部と考えるには、加工部位が狭いことや刃の作り出しがないことから刃部とは考えがたい(註1)。そのため、残された鋭い縁辺を刃として使った石器と考えられようか。

C類にはスクレイパー的な加工部位が存在するため、それぞれ削器や搔器的な機能をもっていたと考えられようか。

VII まとめ

以上のように日向林B遺跡の台形様石器について概観してきたが、現時点は1次的に石器に目を通した段階であり、今後石器個々を詳細に観察する必要がある。本稿では台形様石器として石器を見るにあたっての著者の基本的な考えを述べさせてもらった。

ここまでも述べてきたように台形様石器は形や加工の斉一性が低いため、認定でさえも難しい石器と思われる。日向林B遺跡で台形様石器として判別した石器のなかには、見る人によっては台形様石器ではないと判断されるものも多いと思われる。しかし、台形様石器を観察すると頻度は低いものの2次加工や使用痕と思われる微細な剝離が存在することから、道具として使用されたことは事実である。そのため、これらの石器を積極的に1器種として評価し、分析していく中で機能や用途を考え最終的にはより事実 に即した呼称を与えたいと考えている。

最後になったが、安蒜政雄氏・大竹憲昭氏・佐藤宏之氏・竹岡俊樹氏にはご指導、御助言をいただいた。記してお礼を申し上げます。

註1 B4類の一部には急角度の加工が広く施されるものがあり、これらはB1～B3と同様の機能も考えられる。

参考文献

- 佐藤宏之 1988 「台形様石器研究序論」『考古学雑誌』73-3
- 須藤隆司 1986 「群馬県藪塚遺跡の石器文化—ナイフ形石器の型式学的考察—」
『明治大学考古学博物館館報』2 明治大学考古学博物館
- 須藤隆司 1991 a 「ナイフ形石器の成立」『石器文化研究』3 石器文化研究会
- 須藤隆司 1991 b 「ナイフ形石器型式論（1）」『旧石器考古学』42 旧石器文化談話会
- 谷 和隆 1997 「日向林B遺跡の整理」『第9回長野県旧石器文化研究交流会—発表資料—』
- 麻柄一志 1982 「いわゆる立野ヶ原型ナイフ形石器の基礎的整理」『旧石器考古学』33 旧石器文化談話会